

質問	山頭火という名前は「十干十二支から採用した 生まれ年とは関係ないが響きが気に入って採用した」という話を聞いたことがあるが、そうなのか。
回答	<p>俳号の由来については、利用者也聞いたことのある説(A)と、別の説(B・C・D)の書かれた資料を発見</p> <p>A…俳句の師で『層雲』(自由律俳句誌)を主宰していた荻原井泉水(おぎわら・せいせんすい)が、納音(なっちゃん)に基づき、俳号を‘井水泉’と付けたのに倣ったのではないか</p> <p>B…大阿蘇にちなんだものではないか</p> <p>C…防府右田ヶ獄にある焚火神社にちなんだものではないか</p> <p>D…「山頭」という言葉には死体を山上で焼く意味があり、「山頭火」と書けば焼き場の火が連想される 母フサの変死などが潜在意識にあり、こうした俳号を発想したのではないか</p> <p>後日ご来館 ご自分でも調べておられたようで①②を少しご覧にはなったが借りてはゆかれなかった</p>
回答のプロセス	
資料	<p>①『種田山頭火の妻「咲野」』 Y911.3/タ P63(A・B) A説について詳しい記述あり</p> <p>②『山頭火の話』 Y911.3/タ P19・20(A・C・D) 「納音は山頭火のうまれ年にはあたらない」とあり、D説について詳しい記述あり</p> <p>③『山頭火の周辺』 1993年出版 阿知須・小郡 P17(A) ↑ 1995年出版のものも小郡にあり こちらもP17でA説について記載されている</p>
備考	<p>山頭火の本名は、種田正一。</p> <p>‘山頭火’の俳号は大正2年(1913年)5月号『層雲』より使い始めた。翻訳や文芸批評では‘山頭火’を、俳句(定型俳句)では‘田螺公(たにしこう)’の俳号を使っていた。出家得度して‘耕畝(こうほ)’という俳号も使っていた。(『酔いどれ山頭火』より)</p> <p>大正2年2月発行の椋鳥句会の回覧誌第15号『梅』には「感ずる所あり、自今、田螺公をやめて山頭火の号を用いた」(3月12日午後)とペン書きしてある。(②より)</p> <p>「納音」とは、「六十干支」と「五行」(木、火、土、金、水)とを配して作ったもの。60年で一巡するが30種あり、2年ごとに移り変わる。(③より)</p> <p>「納音」に当て嵌めると、山頭火の生まれ年の明治15年(1882年)の納音は、‘楊柳木(ようりゅうぼく)’で違ふし、‘山頭火’の俳号を使い始めた年でもないが、「雅号の由来というほどのものはありません。たまたま見出したその文字と音と義が気に入ったので、いつとなく用いるようになりました」と『層雲』の中で山頭火自身が書いて、明治7・8年(1874・1875年)の納音を付けて、山頭火としたようだ。(インターネットより)</p>